日韓青年親善交流のつどい感想文

日韓青年親善交流のつどいを経て

日本参加青年　　庄 子　香 穂

私がこの日韓青年親善交流のつどいに参加したのは、一番に自分自身を変えるきっかけが欲しかったからです。３日間のプログラムを通じて、日本青年と韓国青年のみなさんと出会ったことで以前よりも勇気を出すことの大切さを強く感じることができました。いろいろなタイミングで勇気を出せずにチャンスを逃してきてしまった私にとって、このつどいが10代の一つの分岐点になったと感じています。

３日間のプログラムの中で特に印象に残っていることは、ディスカッションと文化体験企画でのことです。私が参加したグループのディスカッションテーマは「青少年の入試競争」でした。自分のグループのテーマが決まったときから、日本の入試制度について改めて調べて自分の経験を整理したり、韓国の入試制度や社会についての本を読んだりして準備をしました。しかし、やはり実際に韓国青年たちの意見を聞くと視点が違っていて多くの学びがありました。特に、日本ではあまり触れられない受験生の精神的なストレスなどについての意見を聞き、受験に対する社会の風潮が日本と大きく違っていることを感じました。意見を聞く中で国の違いがあることもわかりましたが、それぞれが持つ多様な価値観を大切にしたいという思いを感じるディスカッションの時間になりました。

文化体験企画では、韓国青年にチェギチャギを教えてもらって一緒に遊んだことがとても楽しかったです。私は韓国語での会話が得意な訳ではなく、知ってる単語を組み合わせてジェスチャーを交えて会話をしました。拙い韓国語でも言いたいことを理解しようとしてくれ、日本語も使いながら会話してくれることに心が温かくなりました。自分の語学力に自信がなくて恥ずかしいとよく思っていましたが、それよりも目の前の人に向き合うことが言語の違う人同士に必要な態度なのだと強く感じました。

３日間のプログラムを経て、たった３日間だけだったのかと思うほど、とても濃い時間を過ごせました。また、歯がゆい経験をしたことが今後も韓国語の勉強を頑張るモチベーションになりました。このつどいをきっかけに、たくさんの人と出会うことがこんなにも素敵なことなのかと知ることができたと思っています。貴重な体験ができました。ありがとうございました。

かけがえのない縁

日本参加青年　　富 山　　遥

今回のつどいで私が得た一番大きなものは縁である。

私はもとより大学の留学生たちと交流があったが、自信がなくて韓国語で話すことはほとんどなかった。このつどい期間中は日本語ができない韓国青年たちに勇気を出して韓国語で話しかけてみた。通じないこともあったが、身振り手振りで頑張って伝えられたとき、自分の韓国語がうまく相手に伝わったとき、ただ伝わっただけではなく心が通じたような感じがして嬉しかった。反対に日本語がとても流暢な韓国青年もたくさんいた。日常会話だけなら日本人に混ざってもわからないほど上手で、私も同じように韓国語を話せるよう勉強を頑張ろうと思った。

また、韓国青年たちはとてもフレンドリーで、少しでも共通点があると「友達！」と言ってハイタッチしてきた。私は人見知りなので最初こそ仲良くなれるか不安だったが、あっという間にたくさんの友達ができて嬉しかった。文化交流の夕べで私は少林寺拳法を披露したが、韓国青年たちからたくさんの称賛をもらい、文化を発信することはとても楽しく、素晴らしいことだと感じた。

私は韓国青年と交流することを楽しみにつどいに参加したが、日本青年たちとの出会いも非常に有意義だったと感じている。ルームメイトだった日本青年は一人で韓国を一周した経験のある子だった。私は海外に一人で行ったことすらなかったので、その行動力に驚いた。その子は部屋でも空いている時間があると韓国語の試験勉強をし、韓国青年にも流暢な韓国語で話しかける姿を見て、私も彼女を見習いたいと感じている。行きのバスで隣の席に座った子は趣味も韓国語の実力も同じくらいで、一緒に知っている言葉を出し合って韓国青年と話したのがとても良い思い出だ。それ以外にも様々な日本青年と交流することで多くの刺激を受けた。これからも定期的に会って一緒に韓国語を勉強しようと話している。

このつどいを通じ、日本青年にも韓国青年にも大切な友達ができた。かけがえのない縁をこれからも大切にして交流を続けていきたい。

つどいを終えて

日本参加青年　　本多　奏子

私が今回つどいを通じて感じたことは二つあります。

一つ目は、積極的にコミュニケーションをとることの大切さです。現在、直接人と関わらなくても様々な情報をオンライン上で簡単に得ることが出来るようになっています。そのような時代の中で人と直接コミュニケーションをとり、相互理解を深めることの重要性を改めて学ぶことが出来ました。例えば、ディスカッションの時間には、日韓共通の問題といった基本的な事柄から、具体的にそれぞれどのような対策がおこなわれているのかといったところまで内容を深堀りすることができたのが印象的でした。また、アイスブレイクや文化交流の時間にも、交流しなければ実際に知ることのなかった韓国の文化や、他国からみた日本の魅力について知ることが出来ました。

二つ目に、私は一歩を踏み出すことの大切さを学びました。私は韓国語が全く話せず、そもそもこのような海外の青年たちと関わるイベントに参加すること自体初めてでした。そのため、最初はとても緊張していましたが、韓国の青年が日本語で話しかけてくれたことをきっかけに、自分も英語を使ってみたり、教えてもらった韓国語のフレーズを使ってみたりして、会話に挑戦するようになりました。そこで感じたのは、言語に不安があっても、伝えたいという強い気持ちがあればコミュニケーションは成立するということです。結果的に、当初の不安とは裏腹に３日間たくさんの人と話し、とても楽しい時間を過ごすことができました。

今回、３日間という短い時間でしたが、プログラム盛りだくさんの充実した３日間であったと思います。このつどいに参加できたことに感謝し、今後も様々なことにチャレンジしていきたいです。

日韓青年親善交流のつどい　参加青年の声

実行委員の方々、韓国青年、
日本青年などたくさんの人と出会い、
多くのことを学ぶことができ、満足している。
全員と話すことはできなかったが、
様々なプログラムや自由時間を通して
より多くの参加者の皆さんと
交流できて良かった。

どのレクリエーションも、
工夫が凝らされていて韓国青年と
日本青年がたくさん交流できた。

３日間とても充実しており、自分の感覚や
価値観を大きく変えることができた。
交流の助けになる、楽しい活動が多くあったため、
様々な人と交流できた。

ハードスケジュールだったが、
それ以上に本当に楽しい３日間だった。
この縁をこれからも大切にしたい。

日本側にも韓国側にも友人ができ、
たくさんの会話を通して
学べたこと、気づいたことも多く、
有意義な時間を過ごせた。

2泊3日ということで、
最初は不安だったが、最後の夜には
帰りたくなくなっていた。笑顔になる
イベントもたくさんあって終始笑っていた。
2泊3日が短く感じるほど
楽しい国際交流だった。

実際に会って同じテーマについて
議論し、お互いの文化について
紹介しながら友達になっていくことができる、
かけがえのない時間だった。

SNS などでは得られない感覚や情報、
言語を知ることができたのはもちろん、
また絶対に会いたいと思う友人も増え、
とにかく楽しかった。

つどいは 15 日間で一番楽しい時間だった。
日本の友達とたくさん話し合い、一晩中
ディスカッションの成果発表を準備している間、
私たちは更に親しくなることができた。
言語の壁を越えた疎通をすることができた。

今まで日本人の友達を作る機会がなかったが、
多くの日本人の友達ができたようで嬉しく、
国籍の違いは別にしても
同年代にもかかわらず考え方は多様で、
一方で似たような面も多いと感じた。

日韓青年親善交流のつどい　実行委員の声

様々なバックグランドを持った方と
一緒に企画を作ることができ、
非常に有意義な時間を過ごすことができた。

参加青年に楽しんで
もらえていると感じ、
自分自身もとても楽しかった。

準備は大変だったが、
参加青年が楽しそうにしていたので満足している。

比較的円滑に進めることができ、
参加青年にも楽しんでもらえたと思っている。

思ったよりとてもやりがいの
ある交流会だった。何より青年たち
が楽しんでくれたので参加して
良かったと思う。

青年たちの楽しそうな姿が
印象的だった。
青年たちの満足度が私の満足度でもある。

私自身が実行委員として
もっと貢献できた部分があると感じているが、
それ以外は満足度の高いつどいになったと思う。

実行委員と限りある時間の中で準備し、
また当日はランチタイムなどに交流でき、
みなさんそれぞれの生き方を知ることができ、
本当に楽しかった。
また、日韓交流に関心がある
日本人青年たちと話せたのも貴重な経験だった。

富山県プログラム（8月27日～8月31日）

８月27日から31日まで、富山県にて地方プログラムを実施した。

８月27日、富山県に到着した一行は、地元実行委員会による歓迎を受けるとともにオリエンテーションに参加し、プログラムに対する理解を深めた。

８月28日午前、富山県庁にて、松井邦弘富山県こども家庭支援監を表敬訪問し、富山県の魅力等について紹介を受けた。

午後は、富山市国際交流センターにて、「富山市のSDGs取り組み『SDGs未来都市』について」をテーマに講座を受け、富山市のコンパクトシティ構想等についての理解を深めた。その後、富山大学の学生と三つのテーマ（環境、地域活性化、産業とものづくり）についてディスカッションを行い、互いの国での取組みや今後の課題などについて意見交換した。

夕方、歓迎交流会が開かれ、地元からは雅楽の披露があり、韓国青年も歌やダンスなどを披露し、盛況であった。

８月29日午前、富山大学を訪問し、富山大学の学生と前日のディスカッションのまとめ及び成果発表を行った。

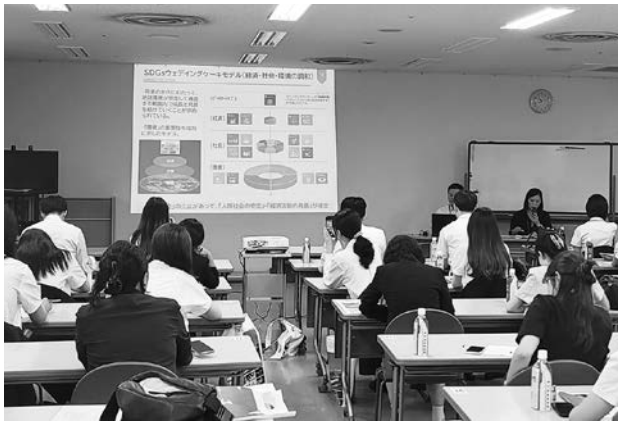
午後は、株式会社タニハタにて組子細工づくり体験をし、伝統工芸に対する理解を深めた。

８月30日、高岡市に移動した一行は、高岡大仏や高岡御車山会館を訪問した。高岡銅器で有名な金屋町では美しい町並みを歩くとともに鋳物作りを実際に体験し、伝統産業の継承と発展について学ぶ機会となった。

午後は、富山県立イタイイタイ病資料館を訪問し、公害問題とその歴史について理解を深めた。

富山県プログラムについて韓国青年からは「SDGsやコンパクトシティなど各都市がどのように取り扱っているかを学ぶことができた。また、同時に韓国ではどのようにしていくべきかを前向きに考えることができた。」「日本は地域活性化を推進しており、その積極性を見て韓国もまた地域的特性をいかすことも重要だと思った。」等の感想があった。

富山県の方たちとともに記念撮影をする
（歓迎交流会）


富山市のSDGsの取組みに関する講座を受ける
（富山市国際交流センター）

公害問題とその歴史について説明を受ける
（富山県立イタイイタイ病資料館）

受入感想文

日本・韓国青年親善交流事業　富山県プログラムについて

富山IYEO 富山県プログラム実行委員長　　中 尾　有 希

世界的なコロナウイルス感染症の流行により事業が中止となって以来、富山県では３年越しに初めて受入れを実現できた。長く国際交流ができなかった時期を経て、このように互いの国を行き来し、交流ができるようになったことを大変有り難く思う。

今回の韓国青年の受入れに当たり、最も苦慮したことがプログラム構成であった。当初、実行委員の中で案として挙がっていた訪問先は、韓国青年の日本滞在の全体的なスケジュールや韓国政府からの要請などを考慮するとプログラムに組み込めないものが多く、受入準備の当初から随分と頭を悩ませた。しかし、プログラムの構成に時間を掛けたからこそ、地元に住む私たちも改めて富山について知り、普段触れることのなかったディープな部分や誇れるところ、次の世代や世界にも伝えていきたいところなどが見えてきて、今一度自分たちの住む地域について見直す良いきっかけとなったように思う。

また、ディスカッションテーマの選定にも長い時間を要した。ディスカッションは今回私たちが最も重点を置いていたプログラムの一つであり、日韓の青年たちにどのような交流をして欲しいか、私たちはどのような場を提供すべきか、実行委員の打合せやグループチャットでも多くの議論を重ねた。

その結果、ディスカッションのときだけ一時的に話し合うのではなく、今回の富山県プログラムのテーマとディスカッションテーマを統一し、施設訪問や体験活動など、富山でのプログラム全体を通してそのテーマをより深く思考したり感じたりしてほしいという結論に至った。最終的に「SDGs持続可能な社会のあり方について考える」を大テーマとし、①環境、②地域活性化、③産業とものづくりを小テーマに決定した。そして、テーマに沿った訪問先として株式会社タニハタ、高岡大仏、高岡御車山会館、鋳物工房利三郎、大寺幸八郎商店、富山県立イタイイタイ病資料館を選んだ。

また、施設等の見学だけでなく、ディスカッションの話題提供として前述の①②③のテーマについてゲストスピーカーを招き、富山の行政や企業での取組みの実践例についての講演を聞く機会も設けた。講演は韓国青年だけでなくディスカッションに参加する富山大学の学生も招き、両国の青年が様々な地域課題、社会問題について考え話し合う機会とした。

最後に今後の活動について、あえて課題を申し上げたい。富山IYEOでは会員の活動参加率が低い、新規会員が増えず組織の活性化ができないなどの課題がある。長く同じ顔ぶれで活動しているため活動の中身もマンネリ化したり、非合理な慣例が残っていたりもする。また、今回の受入れの最中でも何度か感じたが交流や活動自体が自己満足になっており、「地域の国際交流活動の振興に寄与し広く社会への活動の輪を広げていく」という既参加青年としての役割が曖昧になっている会員がいることも事実だ。私たちが今ある課題を解決し、今後も活動を継続していくためには、自分たちだけが楽しかったで終わらず、組織の成長や未来に繋がるような活動を行っていくこと、そのためのアイデアや行動を一人一人が自ら考え、まずは自分たちの地域のIYEOを、所属する価値、入会する価値のある組織に変えていくことが重要だと考えている。

ディスカッション成果を発表する（富山大学）

日本三大仏の一つである高岡大仏を見学する（高岡市）

青森県プログラム（8月31日～9月3日）

８月31日から9月3日まで、青森県にて地方プログラムを実施した。

８月31日、富山県プログラムを終えた一行は、新幹線に乗り、大宮を経由して青森県に入った。初日にはオリエンテーションが行われ、青森県プログラムについて理解を深めた。

９月１日午前、一行は青森市立北小学校を訪問した。前半は、１～３学年の児童と共にラジオ体操を行ったり、児童たちが「ねぶたダンス」を踊る様子を見学したりした。中休みの時間には、児童の案内で校内を見学し、日韓の小学校の共通点や違いを発見する機会を得た。後半は、４～５学年の児童とともに文化発表や○×クイズ、ゲームなどを行い、汗を流しながらお互いの文化について学び、交流を深めることができた。

午後、一行は青森県庁にて、小谷知也青森県副知事を表敬訪問した。

その後、青森県観光物産館アスパムに移動し、青森県の伝統工芸である「裂織」を体験した。韓国青年たちはコースターを作りながら、青森県の伝統と文化を学んだ。

夕方、ホストファミリーとの対面式を兼ねた歓迎会が開かれた。歓迎会には、吉田巧青森県環境生活部青少年・男女共同参画課長を始め、ホストファミリーや地元青年、多くの関係者が参加した。

韓国青年の歌唱パフォーマンスや、地元大学生によるねぶた囃子のパフォーマンスも行われるなど、盛況であった。歓迎会終了後、韓国青年はそれぞれ２泊３日のホームステイに向かった。

９月２日は終日、それぞれのホストファミリーと共に過ごし、寝食を共にしながら日本文化に対する理解を深めた。

翌３日、ホームステイから帰着した一行は、地方プログラムの行程を無事終了させ、帰京した。

青森県プログラムについて韓国青年からは「ホームステイという貴重な経験を通じて日本にも家族ができたようで嬉しかった。」「青森は本当に自然が素敵で素晴らしい地域だった。ねぶた祭りを通じて伝統を継承し守っていくことの重要性を知ることができ、降り注ぐ星々がいっぱい彩られた夜空は本当に人生最高の夜だった。」等の感想があった。

小谷知也青森県副知事と記念撮影をする
（青森県庁）

地元児童にお手玉を教えてもらう
（青森市立北小学校）

ホストファミリーと初めて顔を合わせる
（歓迎会及びホームステイマッチング）

受入感想文

日本・韓国青年親善交流事業　青森県プログラムについて

青森県IYEO　受入実行委員　古舘　真美

私は、平成27（2015）年度に日本・韓国青年親善交流事業に参加しました。その事業で、全国から集まった参加青年と知り合い、韓国青年の皆さんと大変有意義な時間を共有することができました。そのことから、本事業の地方プログラム受入れを長く希望していました。

今回、青森での受入れが決定し、来訪までの準備期間をどのようなプログラムにするかいろいろと考えながら、心から待ち望んでいました。

私たち青森県IYEOメンバーは少人数でありながら、ここ数年は、継続して地方プログラムの受入れを実施することができています。それには、IYEOメンバー以外の方の協力が不可欠です。今回も、IYEOメンバーのほかに、受入れ時に協力してくださるサポーターの皆さんや、県内の様々な団体、地域の方々の全面サポートによってプログラムを実現させることができました。

青森でのプログラム作りの際には、メンバー及びサポーターとオンライン打合せを重ね、青森の文化に触れてもらう機会を作ろうと「裂織体験」と「学校交流」を盛り込むことにしました。

裂織体験では、青森の先人の知恵に触れながら、記念に持ち帰ることができるコースター作りを行いました。各グループには、講師の三好さんから事前に説明を受けたメンバーとサポーターが入り、体験がスムーズに進むように工夫をしました。

学校交流では、陸奥湾を一望できる小学校に赴き、小学生との交流を行いました。日本の運動会のいくつかの種目を体験するとともに、青森市内の小学生はみんな踊れるという「ねぶたダンス」を一緒に踊り、交流を深めました。年齢の差異があるため、互いにうまくコミュニケーションが図れるか心配していましたが、休み時間には、韓国青年たちが小学生に囲まれてあちこちで手を引っ張られて一緒に遊んでいる様子を見ることができました。年齢の差異があっても楽しんで交流することができることが分かり、今後の交流の可能性が広がった気がしました。

このようなプログラム作りができたのは、打合せの際にセンターの方にもご出席いただき、韓国青年に無理のない時間配分となるようスケジュールの確認・調整ができたことも大きかったと思います。

１泊２日のホームステイでは、別れ際に韓国青年とホストファミリーが涙ぐむ様子も見られました。短い時間でしたが、ホストファミリーの皆さんも参加青年を温かく迎えていただいたことに感謝しています。

今回の受入れを通じて、韓国青年の皆さんだけでなく地域の様々な方々と知り合うことができました。地方プログラムの受入れを実施するたびに、協力してくださる地域の方も着実に増えていると実感じています。

いただいた機会を大切に、今後も地方プログラムの受入れの際は、関係団体や地域の方々にも連携、ご協力いただきながら、青森だからできる特色ある地方プログラムを提供していきたいと考えています。

裂織体験でコースターを作る

歓迎会でホストファミリー等と記念写真を撮る

ホストファミリー感想文

真の国際交流

青森県ホストファミリー　折笠　勇樹

幼少期から英語に親しみながら育てた甲斐あって、我が家の娘は小学生にしてネイティブの英語話者と対等に話せる実力を持つに至りました。親としては得意の英語を活かし、どんどん国際交流をし、多様な価値観に触れて欲しいと願っていた折、今回の韓国青年ホームステイのお話を頂き、まさに渡りに船だと感じ、参加したところでございました。２泊３日という短い期間ではありますが、寝食を共にし、様々な時間を共有することは娘にとって極めて濃密な経験になるだろうと考えたからです。

青年たちを受け入れるに当たり、我々が意識したのは「できるだけ何も準備しないこと」でした。私たちは普段から事前に綿密な計画を立てるタイプではなく、状況次第で臨機応変に行動していくので、今回もいつもどおりの我が家でお迎えしようと決めていました。娘と青年たちが双方ともに英語を話すことができたため、コミュニケーションにほぼ壁がなかったことも手伝い、何をするか、どこへ行くか、何を食べるかなどについては、全て青年たちと当日相談し、場当たり的に決めていきました。天候や青年たちの意向を踏まえて決めたその日限りのプランは、我々にとっても青年たちにとっても特別な内容になったと考えています。

３日間という時間を一緒に過ごす中で、日本と韓国には共通点がたくさんあること、一方で隣国とはいえ、やはり全く違うものもまた多く存在するという事実を改めて知ることができました。例えば、日本のドラマやアーティストを青年たちは知っており、韓国のヒット曲を私たちも存じ上げています。娘と青年たちはK-POPを一緒に歌って楽しそうにしていました。しかし、彼女らはランドセルを知らず、私たちは本場のキムチの辛さが分かりません。こういったことは、実際に交流してみないとなかなか知ることができません。文章で文化の違いについて読むのと、直接聞いて話して体験して知るのでは全く違います。自ら体験することによってより深く、詳しく知り、そしてそれが相互理解に近づくということが、私たち親にとってもそうですが、9歳の娘に伝えられたのは極めて大きな収穫だったと考えています。今はまだ、その全てを言葉にはできなくても、きっと娘なりに感じること、思うところはたくさんあったはずです。彼女の今後の人生において、可能な限り自分の目で確かめ、実際に言葉を交わして理解し合うことを大事にしてもらいたいです。本当に貴重な学びを得る機会でした。

８年後には、娘にも是非プログラムに参加して欲しいと感じたとともに、本人もその気になっております。この３日間で得たものは他の体験では埋められないと確信しています。今後とも日韓交流をはじめ、世界各国との交流を深めていきたいと親子で強く思う契機となりました。遠く青森まで来てくれた青年たち、そしてそれを支えた関係者の皆様、誠にありがとうございました。

初めてのすき焼きをみんなで調理する

我が家へ来てくれた感謝を込めてカードを渡す

東京プログラム（9月3日～5日）

９月４日午前、一行は事業の成果を振り返るための評価会を行い、「本事業に参加して学んだこと」「今後この経験をどのようにいかしていきたいか」「プログラムの要望等」の３点についてグループディスカッションを行った。

韓国青年からは「日韓青年親善交流のつどい等で出会った人たちとの関係を継続させたい。」「たくさんの人とコミュニケーションを取ることで、多様な価値観に触れられた。」「ホームステイにおいて礼儀や配慮を知ることができた。偏見や誤解も解消できたと思う。」「日本の地域活性化について学べた。地域に誇りを持ち活性化させようとしているのがよく分かった。」等の発表があった。

13時からは、由布和嘉子内閣府青年国際交流担当室長主催の歓送昼食会が開催された。今回の招へい事業関係者が集まり、親しく懇談するとともに振り返りを行った。

午後、一行は日本青年との都内体験プログラムを行った。日本青年の案内の下、３グループに分かれ、お台場エリア、浅草エリア、秋葉原エリアを回り、日本文化を学びながら日韓両国の青年は交流を深めることができた。

翌５日、一行は、成田国際空港へ向かい、13時20分発の便で帰国の途につき、15日間の日程を無事終了した。

２週間のプログラムを振り返って出た意見を発表する
（評価会）

和菓子作り体験をする
（日本青年との都内体験プログラム）

最後に空港で記念撮影をする